終章　まずは火災予防・火災対策から

ここまで、住宅用火災警報器の必要性や有効性に触れてきた。いざ火災が発生した時、ごく初期に対処できるということで、わたしたちの強い味方であるのは間違いない。住宅火災による死者が減るという話にも納得だ。

しかし「火災予防・火災対策」は、住警器を設置したらそれで万全なのだろうか。

そうではない。住警器は、あくまで「火災が発生した時」に活躍する。いわば、万が一の時の保険だ。

まず最初に考えるべきは、「火災を起こさない」ことだ。普段の生活を見直してみよう。それは台所で火を扱う時だけではない。たこ足配線をしていないだろうか。コンセント周りにほこりがたまっていないだろうか。灰皿が満杯になっていないだろうか…。そのほかにも「室内のものをきちんと片付ける」「脱いだ服を放置しておかない」といった一見関係なさそうなことも、火災予防・対策の一つである。ものがごちゃごちゃしていると、それだけで逃げ道がふさがれる可能性がある。火は、衣服やカーテンなど薄くてヒラヒラする布に移ると一気に燃え広がってしまう。このため脱いだ服を放置しておくのも危険の一つなのだ。

島田市消防本部の鈴木寿之さんが話すように、まずは家族で「火災の怖さ」について話し合ってみよう。そして家の中を見回してみよう。きっと改善できることはある。家族で避難経路を確認しておくのもいい。また、住警器が鳴ってもパニックにならないよう、一度みんなで警報音を聞いておくのもいい。

火災は怖い。とても怖い。何もかもを一瞬で奪ってしまう。大切なものも、大切な人でさえも。

火災は発生してはならないものだが、日常生活の中で起こる可能性は常に存在している。そのことを忘れてはだめだ。人間のちょっとした気の緩みなどが原因で、起きてしまうのだから。

「放火」や、「隣近所からの飛び火」など、自分たちが気を付けていても、どうしようもない場合だってある。

住警器を付けたら終わり、ではない。まずは火災を起こさないよう、身の回りを点検しておくこと。万が一火災が起こったらどう対処するか、日ごろから家族で話し合っておくこと。これらの前提があってこそ、住警器はその効果を発揮するのだ。

あなたの大切な人は誰ですか
あなたを大切に思ってくれる人は誰ですか
あなたのそばにいる人
あなたを勇気付けてくれる人、愛する人…

これからも大切な人を守っていくために
「火災」について知ろう
「火災」の怖ろしさについて話そう
「助かる命」を、絶対見逃さない町になろう

特集

大切なものを守るために

「助かる命」を見逃さない町になろう

住宅用火災警報器で実際に助かった「命」がある

浜松市で…昨年7月30日、共同住宅の一室で、たばこの不始末による火災が発生。住人は就寝中だったが、住警器の音で目覚め、水道水で消火。事なきを得た。

沼津市で…昨年12月9日、ガステーブルに鍋をかけたのを忘れて住人が外出。鍋から上がった煙を住警器が感知して鳴動。警報音を聞きつけた隣人が消防署に通報。大事に至らずに済んだ。

静岡市で…昨年12月9日、建物1階寝室から出火。そこで寝ていた男性は死亡。2階で寝ていた長男は、住警器の警報で飛び起き、ベランダから外に避難し、一命を取り留めた。犠牲者が寝ていた1階寝室には、住警器は付いていなかった。

長泉町で…フライパンに食べ物を入れ、電子レンジで加熱したまま寝てしまった住人。住警器の警報音に気付いた時は、部屋に煙が充満していた。このためすぐに避難。難を逃れた。

伊東市で…今年1月15日、鍋をガスコンロにかけたのを忘れ住人が外出。やがてガスコンロからのぼる煙を住警器が感知して鳴動。近所で遊んでいた子どもが気づき、近くの大人に知らせ通報。大事には至らなかった。